
魔法先生ネギま! 哀川優織の躍動世界

774

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！

哀川優織の躍動世界

【Nコード】

N2813BA

【作者名】

774

【あらすじ】

少しずれた世界。

何で死んだのかは、解明する事は叶わない。

気付けばそこは裁判現場。被告人は「僕」で検察官は「神様」。

裁判を壊してしまったら、どこかの川に出たり、すごい美人にあつたり、自分の人生の根本を聞かされたり。

そして世界は角度を変えてずれていく。

ああすばらしきこの世界。

なんてくそつたれな世界なんでしょうか。

魔法なんて使おうともおもわない。

目的？復讐かもしれないし、違うかもしれないな。
のんびり出来るといいな、って。

まあ、そんなお話。

第一話（前書き）

プロローグと序章が完了するまで只管に予約投稿。

初回に限り昼0時ですが、以降は夕方6時。深夜0時に更新。序章はたぶん計7・8回。

合計、メモ帳にして約80kb

習作です。過度の更新は期待しませんよう。

また、小説情報から作者ページへ行って、私のほかの駄作に手を伸ばすのはやめておいたほうがいい、と先に言っておきます。

では、挨拶はこれにて。

楽しく読んでいただければ幸いで御座います。

この小説は、著・赤松健「魔法先生ネギま!」、著・西尾維新「ネコソグライカル」並びに戯言シリーズ及び、「零崎人識の人間関係」並びに人間シリーズ、「化物語」シリーズなどの設定を拝借させていただきます。端的に言わせていただきますと、主軸として「魔法先生ネギま!」を、設定要素及び物語の若干の交錯要素として西尾維新氏作品と混ぜた、というものです。

そういったものがお嫌いな方、ブラウザバックをお勧めいたします。

また、この作品は習作として自分の出来る限りの表現を使って書かせていただいています。そのため、読者様からの文法のおかしなところや表現技法のへんなどところなどの指摘を、お待ちしております。

では、長くなりましたが、お楽しみいただければ不精私目、感謝感

激の極みで御座います。お楽しみいただけることを願っております。

第一話

ああ、僕は死んだんだな。

理解すること自体に、時間は必要なかった。

唐突過ぎはしたが、覚えが無いわけではなかった。

当たり前と言っては当たり前なんじゃないだろうか、そう思う。

自分はそれだけのことをした。歴然とした自覚がある。

そもそも、そんなことをして、逆に自分がそうならないなんていう保証は無い。寧ろ、なる可能性の方が高い。因果応報というやつだが、そうだからといって納得する気は毛一本、毛頭もない。

と、まあ少し話は変わるが、ヒトの「意識」というものは何に依存するものなのか、考えたことはあるだろうか？ 僕はある。しよっちゅうだ。何か行き詰まった時、現実が疲れた時、そんな時、哲学的というか、そういう事を考えると、意外と落ち着く。

っと、話が脱線した。

例えば、人間の意識は脳にあるとしよう。というか、この場合意識というよりは、「心」と言った方が適切かもしれない。

医療技術の中に、「移植」というものがあるだろう。

もし仮に、技術が進歩して「脳」の移植が可能になったとする。

でもさ、脳って何が詰まっているんだい？

そこでさっきの例だ。脳の中にあるのは「心」だとする。脳味噌だとか、そういうのは今はおいておく事にしよう。

あるところに少年が一人いたとする。

平凡な日常を送っていた少年は、事故で全身麻痺。二度と動けず、

最低限、意思を伝える事しか出来ない。これはまあ、脳以外の死でことだ。

またあるところに、少女が一人いたとする。……別に、少年でも良いけれど。

少女もこれまた事故に遭う。彼女は体は奇跡的に助かったが、ショックで意思を伝える事もできなくなる。これはつまり、脳死。

それは何の因果か、運命の悪戯か。

その事故、同日に起きて、同じ緊急病院に運ばれる。

これまた不思議。二人を担当した医師は同じ人。

医師は考えた、そう、脳移植を。

世界は未来、技術はほぼ確立。

ならやることは一つしかない。医者の本分は、一人でも多く、助けられる命を助ける事。

手術は成功。晴れて、パーツが半分ずつ足りなかった二人の人間は足して二で割ること、一人のヒトとして生きながらえた。

さて、そこで問題だ。その場合、意識はどちらにある？

当然、少年の方。

なんてったって、「心」は脳に宿るんだから。
じゃあさ、少女の「心」は何処にいったの？

と、どうでもいい例えはここまでにして、本題の本題だ。

行き場を失った「心」……まあ、また言い換えて有体に言えば、「魂」ってところか。

本来、宿るはずだった場所を追いやられた「魂」は何処へか。

それは正しく、神のみぞ、知るっつーわけだ。

要は、脳の死とヒトの魂の方向性と関係性のことを説いてるわけ。

そして、そんな僕は脳死判定なのかはわからない。
考える頭があるならば「心」はきつとあるから。

それならきつと、心は脳にはなくて、他のどこかにあるということ
なんだろう。

どうでもいいことかな。

罰って、こわいと思う。

罪やらなんやらって、現実ではなくなたってカミサマとやらがわか
っているらしい。

僕が死んだ理由は単純。人生で、いろいろやりすぎたから。

一寸先は、闇。

いや やりすぎたという表現は少しおかしいかもしれない。

僕がやったという確信はしかと持っているが、信じたくは、ない。

三寸先は、大きな机と椅子に座る何人かの老人たち。その場所
は、スポットライトが当たっているかのように明るい。

僕が手を動かすと、ジャラリ、と手錠から何処に繋がっているのか
わからない鎖も、一緒に揺れる。

腕には、冷たく重い金属の手錠。

腕に圧迫感を感じて、少し不快な気分になる。

と、そんな折、不思議な声がこの空間に訪れた。

【静粛に】

凜とした、威圧感のある声が発せられると同じに、ヒソヒソと喋っていた老人たちが静まる。

女か 男か。中性的で、どちらかといえば、女に近いような、そんな気がする。

カン、カンと相槌……というのだったか、その音はそれの始まりを告げる。

ああ、始まるのか。

裁判。

そう、この場所、空間を動詞を含めた言葉で言い表すなら、「裁判」だ。

裁判官が前方180度に扇のようにして7人ほど座り、その真中には、先ほどの老人たちを黙らせた声の主。指し表すなら、この場での最高責任者というところであろうか。その場所だけ、ほか6人と違い、未だ光が当たらず、どんな人物なのかを窺う事が出来ない。普通の裁判と違うのは、弁護側がいないことと、検察側がいないこと、あと、暗いこと。でもたぶん、意見を発する事も許されない。日本国憲法どうした。ワイマールを返せ。

というか、裁判官一人一人が検察でもあるようなものか。何そのワンスайдゲームこわい。

それはそうと、弁護無しなんて酷いと思う。幾ら金が無いといっても、弁護士ぐらい出してもらってもいいじゃないか。僕は心の中で小さく怒りの念(?)を発する。

まあ、どうでもいいか。

僕は適当に納得すると、先ほどの声がした方を見やる。

その時、やっというか、唐突に中心の人物に光が当たった。

パツ、とその姿が露になるまでに、当然ながらCMやカウントダウンなんてものではなくて、唐突で味気ないものだったけれど、僕は……目を離す事が、出来なくなつた。

それは魅力か。否、最早それは魔力といつても過言ではない。

神々しさ、美しさ、そんな陳腐でチープな言葉では言い表せないほどに、それは凄まじかつた。

中心に現れたのは、他6人などとは格が違う、というか同じ空気を吸うことさえ許さないとわんばかりに、圧倒的な、そう　女性だった。

僕は自分の目を疑つた。こんな「神秘」が存在するのか。こんなものが存在していいのか。

瞬きすらも許されず、吐息を漏らす事もとされない。

そんな僕の様子を見ていないのか、その女性は淡白に手に持った紙を読み上げる。

【被告人には、刑罰が科せられる。被告人「」は正しく、人の一生では補え切れないほどの罪を犯した。そこに酌量の余地はなしと思われ　　】

女性が僕を見ていないように、僕もなにをいつているのかなど、聞いていなかった。

唯一つだけの思いが僕の脳内を、濁流の如く駆け巡る。

思いの奔流が、脳の中を完全に巡り終わると同時に、カチリと、何かが繋がったような気がした。

駄目だ。抑え切れない。抑え切れるはずがない。

そこに理性はなく。そこに知性はない。

或るのはただ、野生のみ。寧猛な狼の如き、狂った野生のみ。

「心」が、飛んだ。

「体」が、躍動した。

「意識」が、弾けた。

「」が牙を剥いた。

僕が右回りに5度傾いたのを感じた。

自分で、何をしたのか全く理解できなかった。

気付いた時には、目を白黒させ、現状を理解する事が出来ない女性と、同じく、現状を理解できない僕しか、その場で「心」を動かすものはいなくなっていた。

恐らく、恐らくだが、老人たちは何もわからないまま、その命の灯火を、雪崩の如き濁流に飲まれ消していったのだろう。

僕自身、寸分も理解できない事を、他人の理解に及ぶ道理があるとも思わない。

気付けば、腕には先ほどまでであったずしりとした重みや、ジャラジャラと五月蠅い音はなくなっていて。

どうやって外したんだろう、そう思って腕を見れば、人より少しばかり華奢な腕はあられもない方向へとアクセラレーションしていた。ついでに、ポタポタと自分の物ではない血が、滴っていた。

地べたに倒れる老人たちをよく見れば、これまた酷い。

皆々顔か、心臓があるはずだったスペースに空き容量があった。

僕が、やったのか？

またか。

やはり、抑え切れなかった。

もう一度、女性の方を見る。

僕の意味とは違う」「が、勝手に言った。

「結婚しましょう」

場にはまた、静寂が戻ってくる。

そんな時、やっと意識が現状に追いついたのか、僕を見るなり、女性悲鳴を上げた。

甲高い、女性特有の声。

先ほどまでの、凜とした声は何処へか。先ほどまでの、魅力は何処へか。

ああ、何だ。そうか。そうなってしまうのか。

その瞬間僕の「」は、興味を失ったらしい。

「」の中で、目の前の女は最早、家畜と同じ位置にまで落ちた。こんなものに魅力を感じてしまった」「は、きっとバカだと自分を嘲笑する。

もういい、こんなもの要らない。

「」がそう思った矢先、僕の目の前の女の首が、プロのフィギュアスケート選手の技のように、綺麗に、宙を、飛んだ。手には、先程より少し多く、血がついていた。

僕の瞳からは涙が滴り落ちていた。

「心」を持つパーツを失った体は、バタリと音を立てて地べたに倒れ伏した。

僕は地に涙を落としながら、丁度足元に転がってきた首を、躊躇うことなく蹴り飛ばした。

いつものことだ、そう。人を殺せば悲しくなる。僕の意味でなくとも僕はそう納得した。

踵を返し、この部屋の出口らしき扉の場所へと歩いてゆく。

扉は案外、大きかった。

両手開きで、3mはありそうな扉だ。

僕は迷いなくそれを開く。ぐしゃぐしゃになった両腕の痛みが、少し気になった。

その先は、白だった。

だがしかし、そんなだからどうだというのだ。こんなところからはさっさとおさらばしよう。

扉の先は見えないが、進まなければ意味はない。道がないなら作らなければ。

きつと「」を変える事は出来ない。

僕はゆっくりと、扉の外へと足を踏み出した。
瞬間、世界は右に175度傾いた。

第一話（後書き）

夕方6時をお待ちくださいませ。

第二話（前書き）

続きでございます。

お楽しみいただければ幸いです。

第二話

傾いた世界は、深い、深い、闇に包まれていた。

どうやら、外には出ることが出来なかったらしい。

というのは、まあ勘だけれど。

さきほどまでぐしゃぐしゃだった手は、いつの間にか元通り、人より少し華奢ないつもの物に戻っていた。

適当に、気が乗るままに歩いてみると、川に出た。向こう岸はかるうじて見える。

花畑があった。綺麗な、朱い花。その花は、こういう理屈か、死を思わせた。

彼岸花　　というやつかもしれない。

川には、船が浮いていた。木で出来た、お粗末な小船。

ある意味当然といっては当然だけど、小船の上には一人、黒いフードつきのコートを着込んだ人が座っていた。

僕は聞いた。　　船を出しているんですか？

フードを被った人は答えた。　　ああそうさ。あっちに魂を送り届けるのが俺の役目さ。

この人物、男だったようだ。

なんとなくだけど、僕は向こう岸に行かないといけない気がする。

僕はまた聞いた。　　お金はかかりますか？

男は、抑揚のない声で答えた。　　ああ、無料^{タダ}じゃない。六文だ。
ないなら服を置いていきな。

どうやらこの船頭の男、男色家らしい。僕だって、死んだとはいえ花も恥らう思春期の男の子だ。

こんな得体の知れない男に、自分の裸体を見せるわけには行かない。僕は冷たい目で男を睨む。

お前さん、何か勘違いしてないかい？ 男は呆れながら言ってきた。何を？ わけがわからない僕は、男の質問に質問で返した。

はあ、と船頭はため息を付いて僕に「乗りな」といつてきた。

まさかこの男、船の上で僕をやらかそうとしているのではないか……。

そんなことを考えて、僕は一步あらずさる。

んなことするわけねえだろ、と男は少し苛ついた風にして、僕に怒鳴った。

まあいいか、と僕は適当に納得して、小船に乗った。

やはり、僕は運が悪い。

小船に乗って数メートル進んだら、船が転覆した。

今度は、左に175度傾いた。

目をあけるとそこは、部屋だった。

どこか、いいお屋敷の執務室か何かを思わせる、しっかりとした、いるだけで気を張りそうな造りの部屋だ。

前を向くと、恐らく執務用だろう机に、人が座っていた。

僕の気配に気付いたのだろうか、その人は書類から顔を上げた。

女性だった。綺麗な、とても、ものすごくどう形容していいのかわ

からないほど、綺麗な。

今は見ることが出来ないが、机の下まで続いているであろう、艶を持った赤いロングの頭髮。其れは奇しくも、先ほど見た彼岸花を死を思わせた。

それと対比するように、病的なほどではないが、大理石と比べた時、大理石が劣ると言わざるを得ないほどの、白磁の如き白い肌。合ネム歡ノキ木、その白が「創造」を思わせた。

瞬間、パチリと目が合った。

僕は、目が離せなくなった。

でもだめだ、魅力を感じてはいけない。僕はまた、殺……してしまう。
僕は咄嗟に目を伏せた。

目の前の女性は僕の仕草を気にする風でもなく、気さくな感じで僕に問うてきた。

「迷子かな、少年」

その声は、母を感じさせた。僕自身、自分の母など知らないが、それでも、人間の本能なのか「母」という認識を、その声に持たせられた。

「らしい……です」

臆病な僕は、おどおどと答えた。

「ふむ……なるほどなるほど。こんなところに迷子で来れるなんて、少年はは中々運がいいかもしれない。どれ、少し待ってなさい」

運がいい？ 「冗談は綺麗さだけにしてくれ。僕の運がよかったら、

世界中、どこをスコップで叩いても水や石油が出てくるだろうさ。
そんな他愛もない事を考えていると、女性は椅子から立ち上がり、
僕の方へと歩いてきた。

「僕に……近づかないでください！」

咄嗟に、僕は怒鳴っていた。

「むむ、それはどうしてかな」

「貴女のような人が近づけば、僕は貴女を……殺して……しまう」
「なるほど……。まあ、いいんじゃない？」

そんなことを言っ、その人は僕に近づいてきた。

駄目だ　押さえ切れない……………っ。

僕は俯いた。

ヒュン、と風を切る音。

その後にゴトン、と物が落ちる音がした。

だから、言ったのに。

僕の目からはまた、涙が滴り落ちた。

そんな僕の耳に、聞こえるはずのない声が聞こえてきた。

「危ない危ない」

えっ？　なんていう間抜けな声を出しながら、僕は顔を上げる。

目の前には、顔を俯ける前にも見た顔が、しっかりと胴体に繋がっ
て、いた。

「わたしじゃなけりゃ、死んでいたね。少年はどうして、わたしを
殺そうとしたのかな？」

くっ、と僕は息を溜め、やっとのことで声をだした。

「駄目……なんです。殺したくないのに……体が勝手に動く。まるで、操られてるみたいに」

「それは興味深い。二重人格？ いや、違う。もっと……そうだね。言うなれば、この行動は少年の「本能」、いや「魂」の持つ形なのかもしれない」

「つまり僕は……本当は人を殺したいと思っているんですか！」

いつの間にか僕は、声を荒げていた。

こんなに叫んだのは、いつ振りだろう。

でも、それでも、納得がいかない。

そんな僕に対して、女性は辛らつに告げる。

「そういうことになっちゃうの……かな」

嘘だ！

僕はそう叫びたかった。

でも、だけど、そうすることは出来なかった。

まるで、僕の「心」が、「魂」がその通りだ、と肯定するかのよう
に僕の発言を許さない。

女性は、言葉を続ける。

「零崎って知ってるかな、少年は」

知らない、そう口に出したかったがショックでまだ言葉が喋れない。

「喋れないなら勝手に言うんだけど。」

わたしはさ、下界のモノが結構好きなのよ。少年、孤児とからしいから知らないかもだけど、所謂サブカルチャーってやつ」

何で僕の事をしっているんだ。

そんな疑問が頭をよぎる。あと、サブカルチャーは知らないわけではない。とはいっても、少しだけ。

「それで、わたしのお気に入りの本の一つに戯言シリーズというのがあるんだけど、それには「零？一賊」っていう殺人集団が登場しているの。物騒よね。

その一族って、みんな「殺人」をすることに良心の呵責も、ストッパーもない。ただ人を「殺す」ことを「零崎」であるとした、集団。少年は言うなれば、出来損ないの零崎。意識を持って人を殺さず、意識の外で人を殺す。意識してるやつより始末が悪いのよね」

いつの間にか女性は、近頃の若い女性を彷彿とさせるような喋り方に変わっていた。

僕は饒舌に喋る彼女の言葉を、今はただ聞く。

それにしてもこの女性、何故ここまで自分を構うのか。こんな、得たいの知れない自分に。

そして何故だか、今はとても気分が落ち着いている。

「結論を完結に言わせて貰えばね、少年、あなた

狂っているの」

瞬間、僕の脳はストップした。

先ほどまでの安心感は消え、何も考える事が出来なくなる。

「星が、悪かったのよ」

星？

女性の言葉に、なんとか脳を動かす。

「ほらよく言うじゃない？ 何とかの星の下に生まれた人間は、どんな運命を辿る、とか。少年は、そのなかでもデンジャラスな星の下に生まれちゃったの」

デンジャラスなんていう俗っぽい言葉を使われるとは思っていなかった僕は、自分の強張っていた体から少しずつ力が抜けていくのを感じた。

女性は僕から離れ、執務机までまた歩いていく。女性は机の上に、いつの間にか置いてあった資料を手に取ると、途端に優しい表情を悲しげな表情に変えた。

そんな顔をしたまま、女性はゆっくりと、僕に 近づいてきて、泣き出しそうになりながらも、言葉を紡いだ。

「結局、運が……悪かったのよ」

その言葉を聞いて、僕の中で何かがプツンと音を立てて、切れた。

「運……？ 運って何だよ！ 僕の人生、運のせいで滅茶苦茶だよ！ 巫山戯んなよ！ 運が悪くて、星が悪くて……それで俺の人生バツドエンドだよ！ なんで……だよ……」

自分でもわかっていた。運が悪いという事自体。今まで「僕は運が悪い」って自分の中で無理やり納得してきたけれど、今、ついに溜めていたものが溢れ出してしまった。

情けない事も自分で理解できているし、それが八つ当たりだということも、頭のどこか冷静なところで分かってしまっている。

「ごめんなさい……」

女性は何故か僕に謝った。

何で？ どうして？ 僕が悪いのに。

「何で……何で貴女が、謝るんですか」

「私がいけないの……私が、いなければ、こんなことには……少年はこんなところにこなくてよかったのに」

え？

「さつき、ちょっと待ってて、っていったでしょ？ アレね、少年のこと調べてたの。調べて、それでわかってしまった。少年の、強制的に背負わされてしまった、咎を」

神様というものは、世界中に存在するあらゆる物を、一つ一つ情報をまとめ、書類化ファイリングしているらしい。

この女性は、突然の迷子である僕に興味をもったそうだ。調べて、わかった答え。

僕が、何故ここにきたのか、その理由わけ。
僕が咎を背負う羽目になった、その所以ゆえん。

「少年の生まれた運命の星、それは私を示す星。破壊と創造。明けは創造、宵は破壊。その中間は、わからない。少年が生まれたのは、何が起こるかわからないパンドラの時間。中に入っているのは災厄か、はたまた平和か。残念……いえ、不幸中の幸いというのかしら、少年が貰ったものは、両方。平和を希求し、その中で破壊を振りまく。そう、少年の星は」

シヴァ。

続けられたのは、鳥のささやきの様な小さな呟きだったが、僕の耳には、確かに届いてしまった。

「ごめんなさい……」

女性　ヒンドゥー教の破壊神シヴァ　は、懺悔の様に、小さく、肩を震わせながらも一度、そう呟いた。
僕の目元からは知らず、涙が溢れ出していた。

「でも……あなたのせいじゃ、ない」

涙が出るのを無理やり無視し、そうとだけ言って、僕はこの荘厳な部屋の入り口に向かって歩き出す。

「どこに行くの」

シヴァは僕に問ってくる。

僕は、先ほどのシヴァの懺悔の声の様に小さく呟く。

「どこか。僕は行かないと。何かしていないと、僕はおかしくなってしまうから」

それは偽る事のない本心だ。

この場を離れて、何かしていないと今にも心の中の何かが瓦解して、壊れたダムに押し寄せる水のように、何もかもを飲み込んでしまう、そんな気がしたから。

「そう……。なら、これをあげる」

シヴァは何もないはずの空間に手をつ突っ込み、何かを取り出すと、

僕の方に放って来た。

シヴァが僕に投げ渡してきたのは、細長い棒状のモノが入った袋だった。

「これは？」

なんの気なく、僕は簡潔に聞いた。

あっちに言ったらあけて、そうとだけ言ってシヴァは机の椅子へと戻っていく。

僕はまた簡潔にありがとう、とだけいつて扉へと歩いてゆく。

扉はまあ、普通のもので身長は2mもなければ屈んだりなどする必要はなさそうな、一般家庭にもあるようなものだった。

「さようなら」と僕は、既に机で書類と向き合っているシヴァへと呼びかける。

するとシヴァは書類の方を向きながらも、「さようなら」と返してくれた。

扉を開けてみるも、そこには何もなかった。

なんだ、と拍子抜けしたわけではないが、特に何もなかったことで安心するわけでもない。

僕は迷うことなく、何も無いところへと、足を突っ込んだ。

本日三回目の、感覚。

世界は、今度は365度ほどずれた。

僕の意識が消える瞬間、シヴァの声が聞こえた気がした。

聞き間違いでもなければきっと彼女は、こういったと思う。

頑張ってね、私の息子。

僕は心の中だけでも、答えた。

ありがとう　母さん。

僕は意外と、母性に甘えるタイプだったようだ。

そして僕の意識は、完全に掻き消えた。

第二話（後書き）

n
e
x
t
A
'
M
O
O
'
c
l
o
c
k

第三話（前書き）

今日はもう明日。

楽しんでいただければ恐悦至極で御座います。

第三話

目を開いて最初に理解できた色は、白。ただ、それは気を失う前に見たような全てを覆い尽くすような白じゃなくて、やさしい絹のような白だ。

どうやら、今度はちゃんと現実にてこれたらしい。

それにしても、だ。

ここは？

ここは、そう。

「何処だ？」

「おや、目が覚めましたか、お客さま」

流暢な、訛を感じさせないお手本のような英語だ。

そんな声がした方を見れば、何処かで見た顔。つい最近、それも1時間以内に見たような気がする。

ああ、そうだ。思い出した。あの女性に　シヴァに、よく似ている。瓜二つ。いや、これほどの美貌を持つ女性たちを、瓜などにあてはめていいわけがない。言うなれば、華だ。「花」ではなく、より美しさを強調した、「華」。

違うのは髪の色だ。朱ではなく、とても……とても綺麗な、純正の「金」も眩むほどの金髪。

その女性は優しい、母　シヴァ　を幻視させるような目で、僕を見ていた。

そんな真っ直ぐな目に、頬が赤みを帯びてしまうのを感じて、咄嗟に顔を伏せてしまう。

「ここは、何処でしょうか」

「ここは知らない貴族の屋敷です」

俯きながら僕が昔身に着けた、ちょっとしたきこちない英語でそんなことを聞くと、女性はまた、綺麗な声でそう答えてくれた。

やっと気付いたけれど、どうやら僕はベッドに寝かされているらしい。生前 といっても、僕にとって何時^{いつ}が生前で生後なのかは曖昧だから、今の状況をどう定義していいのかわからない 感じたことのないような暖かさと柔らかさから、高い物なのだろうということはわかる。

貴族の屋敷だといっていたし、見たことは無いが高価なものもたくさんあるのだろう。

ふと、手元に違和感を感じ、高価そうな毛布の中から腕を出す。腕には、シヴァに貰った物をしっかりと握っていた。

「ああ、それですか。あなたを寝かそうとした時にとろうと思ったんですが、どうにも手から離れなくて。まるで、形見か何かの様に握っていらっしやって。ふふっ」

女性はそういつて小さく笑った。見ていなくとも、その様子が簡単にそうぞうできてしまい、また少し体温が上がったのを感じた。

それにしても、気絶しながらも離そうとしなかったのか、僕は。形見か。云い得て妙だが、ある意味、それに近いものかもしれない。

そんなことを考えていると、コンコンと、ドアをノックする音。

誰かがドアの前にいるのであるうという事はわかったが、それ以外に僕は「違和感」を感じた。

「気配」がなかった。

この部屋の前まで歩いてくる音さえもせず、ノックという行動を起

こすその時まで気配を感じることが出来なかった。

それでも、少しは　いや、少しじゃないか。

別に自慢したり誇ったりしたいわけではないけれど、というか寧ろ自分としては嫌なくらいだけど、僕は生来そうだったことには敏感だ。

女性はそのような僕のふうには気付いていないようで、先ほどまでと同じ優しい声で「どうぞ」とだけ言うと、扉が開き男が一人室内に入ってきた。

背の程は180くらいだろうか、少し細身であろう体軀からは、大きさを多大に感じさせるも、威圧感や迫力といったものは感じさせない。消しているだけ、なのかもしれないが。

ピシッと伸ばした背筋に、黒い一昔前を思わせる執事服。

その上に乗る顔からは優しい雰囲気、その双眸をレンズ越しに覗かせる眼鏡からは愛嬌さえも感じることが出来る。

だが、僕が見るのはそこではない。

見ただけで、わかった。

僕の「本能」が頭の中でけたたましい警鐘を鳴らす。

こいつは　本物だ。

ぞくぞくと、「本能」が僕の体を蝕んでいこうとしているのが、感覚でわかる。

落ち着け。落ち着け。と心の中で念じるように只管に繰り返す。

「奥様、お嬢様がお歸りに　　おや、目を覚まされましたか、御客人」

男は気のよさそうな笑みを浮かべているが　違つ。この笑みは作り物だ。

見る人、分かる人が見れば、一目で感じることの出来る「違和感」。

佇^{たたず}まい、距離の取り方、どれもこれもわざわざらしいほどに完璧^{たふし}。精巧^{たふし}に作りこまれた「偽者」だった。

確実に、時間とともに「本能」が侵食していく。が、その変化は一向に訪れない。

何でだろう。

侵食が完了する直前までは確実に進んでいるはずなのに、その先…つまり、体の主導権が何時まで経っても奪われない。

「ええ、今お起きになったところでして。それでガエターノさん、娘が帰ってきたそうですね」

「はい。もうすぐ此処へいらっしゃると思いますよ。御客人のことが大層気になっていらしたようで おっと」

男 ガエターノと呼ばれた人物が言葉を言い切る前に、その脇から、金色のヤギが いや、見間違えたかった。

飛び出してきたのは、少女だった。

僕の隣にいるおっとりとした女性をそのまま幼くした様な、可憐な金髪の少女。恐らく、母子^{おやこ}だろう。

僕の「心」がドキリ、と跳ねた。

シヴァや、目の前の女性に感じたものとは少し違う、初めての感覚。どうしてか、その初心^{つぶ}な感覚は僕の「本能」を宥める様にして落ち着かせてくれた。安心感、それが「心」を満たす。

子どもというのは、人の心の動きに敏感だということを聞いたことがある。

そんな僕の様子に気がついたのか、いつの間にか僕の寝るベッドの上に乗って覗き込むように、心配するような顔で僕を見ていた。

「こら、エヴァンジェリン。お客様はまだ起きたばかりなのよ」

「はは……大丈夫ですよ。子どもは、好きですから」

「うちの子がすいません」

厭^あくまで、「表で出ている僕」は、だが。

エヴァンジェリンと名を呼ばれた少女は、ちょうど僕の膝の上辺りにちょこんと、両足で僕の膝を挟み込むようにして座っている。

その眼^{まなこ}は、まだ僕の目を真っ直ぐに見つめていた。

「お客様はそう言ってらっしゃるけど、エヴァンジェリン、いい子だから降りなさい」

「だってね、お母様。この人、とっても寂しそうな目してる」

「っ」

子どもは、鋭い。人があまり知られたくないことを、過敏に感じ取る。

それを、遠慮なく、堂々と、口に出してくれる。

「大丈夫……です。エヴァンジェリンちゃん　だったかな、いいよ。そこにいて」

「本当？　ありがとうっ！」

子どもらしい、純真無垢な満面の笑み。その笑顔にまた、ドキンとする。

「それでは少し、お話でもしましょうか。貴方がここに来た経緯^{いきさつ}は、記憶におありでしょうか」

「いえ。……何も」

「でしょうね。貴方はその森でその子……エヴァンジェリンが、お倒れになっているところを見つけました」

女性が指差す方を見ると、小洒落た窓の向こう、鬱蒼と生い茂る森が見えた。夜道を一人で歩けば、何か見えてしまっんじゃないかと思っような、おどおどしい雰囲気を持った森。

どうやら僕は扉をくぐった後、あの森の中にでたようだ。

女性は説明を続ける。

「娘が走って私のところにきたときには驚きました。とっても忙し様子でいうんですよ。森に生き倒れがいる、早くしないと死んじやうって。この子はいつも落ち着きがないんですけど……その時は特に。私もこれは一大事だと思ひまして、息せき切って走っていったんですよ。そのガエターノさんと一緒に」

「私も驚きました。お嬢様が私と奥様の服の裾を力いっばい引つ張られて」

男のしみじみと語る風は同情を誘わせるが、僕は警戒を解かない。この手のタイプは警戒しすぎてても警戒しなさ過ぎててもいけない。丁度いい程度に注意しておかなければ、足元をすくわれる。

「娘に引かれるままに進んでいけばまあ、驚きました。まるで死んでいるかのように人が気絶しているじゃありませんか。大急ぎでこの屋敷までガエターノさんに運んでもらいました。此処に来るころには貴方はもう真っ青で、血が通っていないかのように心配したのですが……見たところ、大事なさそうでよかったです……」

女性は目を覚ました時に見たのと同じ、優しい、母を感じさせる笑顔に向けたきた。

「ああ、そういえば名前をお教えしていませんでしたね。私の名前はデエス・N・D・マクダウェル。娘はエヴァンジェリン、そして

我が家で執事をやってくださっているガエターノ・ヴァレッティさん。それで 貴方のお名前を、お聞かせいただいても？」

名前。名前には力が宿するという。いや、「縛り」に近いものか。名前はそれ自体にその「名」を持つモノを縛る力を持っている。

その人の人となりや人生を決める最初の何割かは、それによって決まると言っても過言ではない。

ならば僕の生前の名前は何だったか。記憶を探ろうにも、出てこない。思い出せない。いや、思い出したくないだけなのかもしれない。自分で自分の記憶に鍵をかけて心の奥底にしまってしまったんだろうと、適当な当たりをつける。

では 今世ではどうしようか。

自分で決めるべき、なんだろう。誰も僕の名前を決める事の出来る人はこの場にはいない。
ならば、そうする他ない。

そんなことを考えていると、ふと、一つ思いついた。
まるで元から決めていた いや、決まっていたかのように、口から出ていた。

「……優織、あいかわゆうじ哀川優織ゆうじきといいます」

僕は、僕の運命は 僕を変えることが出来るのであろうか。

この柵しからみから解き放ってくれるのだろうか。

どうなるかわからないけど、僕は……前に進むしか、ないのだろつ。

そうして、僕の奇怪で奇妙な第二生が始まったようだ。

第三話（後書き）

少し短いですね。

n e x t . P , M 6 o ' c l o c k

第四話（前書き）

夕方です。

楽しんでいただけるかなあ。

第四話

この光景を一言で表現しようとすることは、きっと、叶わない。

一面に広がる森の中でひとときわ目を引く、切り立った崖の上、女はその真紅の髪を靡かせる。

真紅の中に、稲妻を思わせる黄色のメッシュの様なものが目を引く、前衛的な髪型。

目を引くのはその特徴的な髪型だけではない。

髪色に合わせるような、真赤なワインレッドのスーツ。

そして、あまりにも常人とかけ離れた……圧倒的なプロポーション。ただ……目つきは、異様に悪かったが。

知る人は知る。

知らぬものは、裏の社会では行きぬくことは難しい。裏社会において情報とは、己が運命を最も左右するからだ。

人はこの女のことを、こう、言う。否、「こう」ではなく「これら」の名で言う。

《人類最強の請負人》、《赤き征伐》、《死色の真紅》、《疾風怒濤》、《一騎当千》、《赤笑虎》、《仙人殺し》、《砂漠の鷹》、《嵐の前の暴風雨》
そして

《人類最強》、と。

知らぬ一般人が見れば、こう言うのだろう。

「美しい」、と。

ただ、この女の本質をある程度理解している少年　　いーちゃんと

呼ばれる少年は、露ほどにもそんなことは思わないのだろう。
そんなことを考え、女は苦笑する。

ふと、女は此処に來た経緯を思い出した。
それは唐突だったが、いつものことだった。

依頼、女の元に訪れたのは一つの依頼だった。

「少しばかり、息子を助けてやって欲しい」、要約するとそういった内容だった。

内容を理解した直後はそれこそ、興味を持つ事は愚か、やろうなどとは考えなかった。
が。

興味が湧いたのは、唐突だった。

女のところ、一人、訪ねてきた。それこそ自分でも見惚れてしま
うくらいの、絶世の美女が。

話を聞けば、件の依頼を出した人物だそうだった。

そこで女は気付く。何故今まで不思議と思わなかったのか、「不思議」だと思ふくらいに、不思議なことであった。

女は長期間特定した住処^{すみか}を、基本的に持つことはない。依頼を出す
には、会いに行くしか方法はないはずだ。

それがどういふことか、この目麗しい女に合うのは、初めてだ。

ならば如何してどうやって如何様にして、依頼は女の下に無事届く
事が出来たのか。

変装？ そんなものもわからない自分ではない。

他人に行かせた？ 自分のところに「いーちゃん」以外がいるのは
随分と久しぶりなはずだ。

女は俄然興味が湧いた。自分の、理解の及ばない場所。

《人類最強》の名は伊達ではない。

自分 人類が理解できない場所に位置する存在など、ある程度絞
られる。

そしてこの美貌だ。推理小説は嫌いだが、女は自分の勘には自身がある。一応だが 《探偵》の肩書きも持つてはいた。十中八九、この女性は神 或いは、それに準じたモノであろう、いや、きっと神だ。女は自分の「勘」を信じた。

案の定 というより、当然の結果だったというべきか。

女性は何のけなく、暴露したのだった。「自分は、神をやらせていただいています」なんて風に。

それには流石の《人類最強》も目を丸く はしなかったのだが、それでも、大層驚いた。

神というのは、随分と気楽なんだな……だなんて考えるくらいには落ち着いていたわけだが。

女性本人から聞かされた内容は、先に聞いていたものと大差はなかった。

何故わざわざ出向いてきたんだと聞けば、優しいお釈迦様のような笑顔で「私がこなければ、きっと貴女は依頼を受けてくれなかったでしょうから」と。

お見通しか、と心の中で舌を1寸ほど巻いた。

女は依頼を受ける事にした。理由は簡単。興味を持った いや、少し違う。「匂い」がしたからだ。

それも、自分の一等好きな、陳腐^{ストーリー}だけど爽快な物語が起こる「匂い」が。

見てみたいとも思った。

それほど長い期間とはいえないが、自分が師事し、生き方を教える人間がどれほど成長せしめるかを。

そこまでで、女は考えるのをやめた。

これではまるで自分が年を取ってしまった様ではないか、なんてことを思っただからだ。

いや、そもそもその思考にいたること自体が年寄りくさい
って、泥沼じゃねえか。

女は内心で自分に突っ込む。

少し時は立ち、女は落ち着いたのか、スポーツ選手の様に、という
よりは、喧嘩前にやるような首を回したりといった 準備運動、
らしきものを始める。

最後に大きく伸びをすると、女は何の気なしに 崖から飛んだ、
飛び降りた。何の躊躇いも見せず。

これをみていた人間がいたら両手で顔を塞いだかもしれない。
だが、女は大した事無いとばかりに、腕も何も動かさず、ただ地球
の重力に従って自由落下を続ける。

真赤な髪と、真赤なスーツが引き立ち、さながら、その落ちていく
姿は真赤な龍を思わせた。

正に地面にぶつかる、その直前、女は見事に空中で一回転を決める
と、スタリと立った。

あまりに呆気なく、当然とばかりに、スタリと。

「さあて、行くか」そんな呟きは、森の木の一つに反射して、
その場所に帰ってくる時には、女の姿はそこになかった。

この女、名を

あいかわ
じゅん
哀川、潤。

人は彼女を

《人類最強》と、呼ぶ。

目を開いて最初に写るのは、最早いつも事となった、豪華なシャン

デリアだ。

この家に身を置いて、数年が経った。

保護してもらったその日、僕は考え込んだ。

なんといつても、行くところもなければ、この世界の事もからきしわからない。

出来れば、安定した宿と、食べ物欲しかったが、そうそう見つかるとも思っていない。

とはいっても、いつまでも世話になるわけにはいかない。

その日一日だけ泊まらせてもらい、宛てもなく出て行く気だったのだが、

嬉しい誤算だった。

この屋敷の事実上の家主である、デエス・N・D・マクダウェル。彼女はこの家に住まないか、と、そう僕にいつてきた。

当たり前ながら、僕は最初断った。

稼ぎ口も、何も、何もかも、僕は持っていない。

そんな人間、邪魔以外の何者でもないだろう。

だから断ったのだが。

どうにも、エヴァンジェリンちゃんは、僕に懐いてしまったらしい。考えている間も、僕の寝かせて貰っているベッドの上で僕の事をずっと見つめていた。

これでは、断固として断る事が出来ない。それほどの威力^{もの}なのだ、子どもの無垢な笑顔というやつは。

そんなわけで、なし崩し的に僕はこの屋敷にお世話になる事になった。

もちろん、ただ飯などは僕の感性では到底許容できなかったのも無理を言って屋敷の雑事を手伝わせてもらっていた。とはいっても、それだけが理由というわけではない。

何故か、気にかかるのだ。

執事をやっているという男　ガエターノは、何処か信用ならない。
この男が近い未来、何かするのではないか　いや、する。絶対に
する。

少しばかり癪ではあるが……「　は、役に立つ。やはり、果て
しなく、とてつもなく癪ではあるのだが。

数年間の間、隙を見せれば「　のままに殺してしまおうと、そ
う思っていたが、やはりというか、隙がない。

それに、例え隙を見せて「　に全てを委ねても、何故か自信が
もてない。　自信など、持ちたくもないが。

もし仮に、殺すことが出来たとしても、「その後」だ。

当然ながら、今の僕に「　を解き放って、それを飼い慣らすこ
となど、できないだろう。

そうすればどうなるか。……単純な事だ。あの二人も確実に巻き込
み　殺してしまう。

そんな風なことを考えていると、やはり時間は待ってくれないとい
うのがしみじみとわかる。早、3年だ。

でも何故か、この3年間、一度も「　が表に出ようとはしてこ
なかった。

シヴァに貰ったアレか……それとも、あの子のお陰か、それは僕に
も、ましてやあの子にもわからないだろう。

3年経った今でも、相変わらずデエスさんは優しい笑顔でゆったり
と過ごしている。

生活物資は月に一度、ガエターノが買ってきている、らしい。

「らしい」というのは、見たことがないからだ。三年間、約72ヶ
月、一度たりとも見たことがない。

僕の疑いは、日に日に強まるばかり。

会った当初7歳だったエヴァンジェリンちゃんは、今年で二分の一

成人の10歳。

今年、といったが、厳密に言くと、「今日」だ。

嫌な予感、さらに現実味を増した。

あまりにも、タイミングがよすぎる。

気がするだけ、ではある

が。

デエスさんに聞いたところによると、今日は月に一度の買い込みの日だそうだ。

この屋敷の立つ森は、やはり広大なようで、一番近いある程度整った町に行くのに、徒歩で片道4時間はかかる。僕も一度だけ、いったことがある。

どうやって一か月分、それも4人分もの荷物を、徒歩で持ってきているのか、わからない。

車なんてものはない。

謎は深くなるばかりだ。

そこまで考え、ベッドから上体を起こし、大きく伸びをする。伸びと一緒に、ふさりと髪の毛も持ち上がった。

屋敷の部屋の中でも、二階の一番右の突き当たりの部屋、僕はそこで寝泊りをさせてもらっていた。

この部屋は昔、デエスさんの夫が書斎として使っていたらしいが、当の管理人たるその人は、僕の来る5年前、謎の病に罹り、帰らぬ人となったらしい。

この書斎、よつぽど太陽に気に入られているのか、朝日が部屋一面に入ってくる。

お陰で毎日、すっきりと寝起きする事が出来ていた。

足を布団から出そうとすると、少し重みを感じた。またか、と思い布団を捲ると案の定、そこには金色の少女がスヤスヤと寝息を立てて眠っていた。

起こすのも可哀想なので、出来るだけやさしめに頭を撫でると、少女はううん、と小さく声を出してまた寝息を立て始めた。

ゆつくりと、起こさないように布団から足を出し、立ち上がる。もう一度伸びをすると、後ろ髪からぴよこりと跳ねた一房が頬を擦った。

寝る前にもう少し乾かせばよかったか、なんて、今更遅い、か。とりあえず顔を洗って髪を梳かしに　と、忘れるところだった。

僕はベッドの横に立てかけてある、シヴァに貰ったアレを掴む。シヴァに貰ったこの謎の物体だが、3年経った今でも云とも寸とも言わない。

どころか、袋から出すことも出来ない。

この袋、一体どういう仕掛けになっているのかと思って、中身の出るであろう場所を留める紐をみて見ると、謎の文字が編み込まれていた。当然ながら読むことは出来なかったが。

きつと何かおまじないのようなものだろう、なんていったって、神様がくれた物なんだから。

その物を持ちながら、ゆつくりと一階への階段を降りて広間へといくと、既にデエスさんは起きていた。

不思議な人だ。

いつも、僕や誰よりも早く起きて、広間でまったりと外を見ている。3年間、ずっと、毎日、欠かさず。

やがて僕が起きてきた事に気付いたのか、こちらを向いた。

「おはようございます、優織さん」

「ええ、おはよう御座います。デエスさん」

いつもと同じように朝の挨拶を交わす。

ふとみれば、おかしいことに、デエスさんはいつまでも僕の方を見ている。

いつもは挨拶をしてニコリと笑ったあと、またすぐに目を外に向け

てしまうのだが、今日は違った。

3年間、曲がりなりにも一緒に暮らしてきて、初めて、というのは些か違和感を感じずにはいらなかった。

「どうかなさったんですか、デエスさん」

「あ、いや。どうしてかしら、今日の優織さん　いえ、なんでも……ありませんでした」

おかしな人だ。「オカシイ」という意味ではなくて、変な、という意味で。

「……そう、ですか。では、僕はこれで」

「はい、今日も一日よろしく願います。　ああ、そうそう。

今日の夜はエヴァンジェリンの誕生パーティーをしますから。ふふつ。といつても、4人ですが

「ええ、わかっています。それでは、今日も一日お仕事させて頂きます」

それだけいって、僕は顔を洗いに外の噴水に向かった。

この時に、僕は気付いていればよかったんだ。

「3年間で初めて」という違和感の正体に。

その日の、オカシさに。

そうすればきつと　あんな事には、ならなかったんだから

第四話（後書き）

ねくすと。えーえむぜろおくろっく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2813ba/>

魔法先生ネギま! 哀川優織の躍動世界

2012年1月8日18時53分発行